

情報環境（言語景観・意味景観）とのインタラクション -- 多層的異文化コミュニケーションの危険な曲がり角 -- Cognitive Interactions with Linguistic and Semiotic Environments - Those Obscure Signs of Directions in Intercultural Communication -

原田 康也¹, 佐良木 昌², 平松 裕子³, 森下 美和⁴

Yasunari HARADA, Masashi SARAKI, Yuko HIRAMATSU, Miwa MORISHITA

¹早稲田大学, ²明治大学, ³中央大学, ⁴神戸学院大学

Waseda University, Meiji University, Chuo University, Kobe Gakuin University

harada@waseda.jp, saraki@st.rim.or.jp, susana_y@tamacc.chuo-u.ac.jp, miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

Abstract

A little knowledge about cultures other than your own could be dangerous, which may lead to greater and more serious confusions and disasters than having no knowledge at all. Importing merchandise, food, animals and plants, sportive activities and social systems, along with nomenclature to express them is very common and wide-spread throughout history of the world and they often involved substantial degree of customization and localization, which usually change what is important to something almost unrecognizably different.

Gestures, signs and symbols are difficult to understand without proper contexts and tacit coding rules. Such basic symbols for Japanese as ○ and × could mean something completely different or opposite things or may not mean anything coherent for non-Japanese. On a local map, there may be one particular point designated by such wordings as “You are here.” or “Vous êtes ici.” but in Japanese we would have 「現在地」 meaning “Present and current location.”

Semiotic landscapes for diverse users, with which local residents and domestic and international visitors interact and navigate themselves, should take those pitfalls of intercultural communication to be of any use. Considering acoustic landscape may further help support diversity of participant's to deal with the meaning.

Keywords —Linguistic Landscape, Semiotic Landscape, Cognitive Interactions, Navigation, Acoustic Landscape

1. はじめに

自国あるいは自分の住む狭い世界での言語・文化・行動の習慣に深くはまり込んで他者の言語・文化・行動の習慣を顧みないことは誤解や摩擦の原因となるが、多言語・多文化の接触と交流の機会が拡大するにつれて、自分の慣れ親しんだ言語・文化・行動の習慣と異なる社会に対する不十分で表層的な理解（または誤解）がより大きな誤解や摩擦の原因となる事例も増え、『文化（的）盗用』として批判される場合もある¹。ただし、何が「文化（的）盗用」になるかは歴史の再認識が作

¹ 外国語の学習や外国語の使用がすべて『文化（的）盗用』として批判の対象となる可能性も皆無ではない。

用する可能性も高い。ドイツの音楽グループの「東へのあこがれ（とおそらくは大いなる誤解）」を出発点とする disco music が世界的ヒット曲となった結果、対象となった地域でも歓迎され、その地域を代表する音楽として認識されるという意味で、脚注のビデオ²は「常識」を疑うきっかけとなる。

他国・他地域から自国・自地域に流入してきた文物が自国風に変化し広く受け入れられるようになるというのは一般的な現象で、飲食物に関しては、その名称と合わせてさまざまな事例が古くから記録に残されている³。カレーがインドからイギリス経由で日本に伝来し、日本のカレールーが世界的に普及し、ヨーロッパのコトレットが日本化したカツカツ・トンカツと融合したカツカレーが今度はイギリスで（チキン）カツカレーとなって流行しているという事例や、寿司がアメリカ西海岸でカリフォルニアロールとなり、アメリカの多くのスーパーマーケットや食料品店で日常的に sushi と称するパッケージ商品が販売されているなどの事例が話題となる。醤油の販売単位や味の調整などが典型的だか、localization と customization の過程でオリジナルからは想像もつかない変容を受けることが一般的である。一般的な日本人が「中華料理」だと考える焼き餃子やラーメンや天津飯といった料理が、そのままの形では中国の料理にないことが話題になる。animation / animated film が日本で「アニメ」となり日本の、または日本風アニメを意味する anime が英語に定着している。アメリカ英語で kimono という風呂上りに羽織る派手な色の浴衣のようなものを指して

² 以下の脚注のビデオへのリンクは本稿執筆時（2021/07/09）に確認したものであり、その後見られなくなる可能性は高い。Dschinghis Khan · Москва, Moscow, Moscu (International Version) <https://www.youtube.com/watch?v=V6uq3idN9VE> Чингис Хаан

<https://www.youtube.com/watch?v=AYjehZsXtxE>

³ [1, 2]などを参照。

いた時期も長い。アメリカで *teriyaki / teriyaki sauce* と称するものは日本人が「照り焼き」という名称から想像するものとはかけ離れている。日本の大衆的なうどん屋チェーンが海外店舗展開に際して「ぶっ掛けうどん」の商品名に困るという例もある。

こうした受容と変容・理解と誤解が原因となって行動やコミュニケーションにすれ違いを生む。日本企業や日本人との交流をある程度経験したアメリカ在住の英語母語話者からのメールの冒頭に時候の挨拶が長々と続き違和感を覚えるときがある。日本に長く住み過ぎたと外国人が考える兆候の一つとして、電話するときにお辞儀をする自分に気が付くという話題が過去何十年と繰り返されている。日本からアメリカに出かけたビジネスマンが現地の人と握手をしようとして手を差し出すと、相手はお辞儀をされていてちぐはぐになるという笑い話も多い。2020年以降は握手のかわりに肘を合わせようとする動作もあり、ちぐはぐなやりとりとなる要因が増えている。

2. 借用語・外来語・カタカナ語⁴

現代日本語の書き言葉・文書作成において、ひらがな・カタカナ・漢字は極めて巧みな機能分化により、効率的な文字コミュニケーションを可能としていた。漢字は主に体言（固有名詞を含む名詞）・用言（動詞・形容詞・形容動詞）の語根・語幹に用いられ、ひらがなは助詞・活用語尾など文法的関係を示し、カタカナはオノマトペ・（ヨーロッパ言語からの）借用語・動植物の学名など、音そのものを表すのに用いられた。しかし、漢字が日本語文書の中で意味の重要な部分を担っていること、カタカナ語はどちらかという音をあらわし、意味との直接的な関連性が漢字よりも薄いことから、（欧米語からの借用語について原語を知っている場合は異なるところもあるが）多くの日本人にとってカタカナが並んだテキストは読みにくく、意味が取りにくいと感じられることが予想される。

今日コンビニなどでおやつを購入しようとする時、「でたらHappy♪ おっきいハート Calbee ベジたべる 緑黄色野菜入りあっさりサラダ味」⁵のような文字が様々な書体と色使いでちりばめられた商品パッケージを目にすることになる。日本語の読み書きを身に

着ける前からこのような商品を日常的に目にして育った子供たちは、どのような言語観・文字感覚を持って大人に育つのであろうか、不安を覚える。

外来語の活用は本来的には言語の語彙を豊かにし、その表現力を高める可能性があるが、近年の日本語におけるカタカナ語の使用は乱用から氾濫の域に達している感がある。飲食店のメニューやグルメ・ファッション・美容関係の雑誌等を見ると、カタカナで表記されるのは、単語だけでなく「リンスインシャンプー」・「チーズインハンバーグ」など、複合語的な要素にも及んでいるが、要素となる単語・形態素から統語的・語形成的な関係により構成される意味が、原語として想定される英語などとは異なっている。また、日本語の本来の表記と異なる「ホテル de パソコン」などの「新規」ないし「珍奇」な表現も増えている。カタカナ表記は、単語よりさらに小さな形態素レベルで、「クレカ」・「トレカ」の「-カ」など、ある程度まで規則的・生産的に使用されるものもある。こうしたカタカナ語・カタカナ表記の氾濫により、日本語を学ぼうとする年少の母語話者・外国人定住者・外国人訪問者にとって、日本語の学習・習得が従来以上に困難になっている側面がある。

日本語の食事のメニューには海外からの影響・外来語の影響が大きい。しかし、近年ファミレスなどで人気の「チーズインハンバーグ」をそのまま英語で “cheese in hamburger” / “cheese in hamburger steak” と表記してメニューに掲載する場合もあるが、英語としては意味が通じない。日本語で「サンド」といえば、「サンドイッチ」を意味することも多いが、日本語の「ホットサンド」を英語で表現したつもりで “hot sand” と表記しても、英語話者にとっては砂漠で陽に照らされた灼熱の砂を想起することはあっても、“toasted / grilled sandwiches” を想起することは難しいであろう。ところが、飲食店のメニューに “hot sand” のような表記が見られるだけでなく、google で検索すると店名・調理器具の商品名などにも “hot sand” ないし “hotsand” といった表記が多数見られるのが現状である。一方で、旅行やビジネスで日本を訪れ、コンビニの食事にはまる外国人について話題になることも多いが、最近の YouTube では “tamago sandos” や “boiled egg salad sandos” のような “sando” の表記で、日本の「サンド」に言及しようとする英語表現も見られるようになってきた。ここには、英語 → 外来語としてのカタカナ語 → 短縮語

⁴ 本節は [3-6] に基づいている。

⁵ ベジたべるあっさりサラダ味

<https://www.calbee.co.jp/shohinkensaku/product/?p=20150326153021>

→ 日本語固有の表現 → 日本語由来の借用語としての英語での表現、というような言語接触・言語間交渉の流れが見られる。

2019年11月に、アメリカで「チキンサンドイッチ」の人气が過熱して、殺人事件まで引き起こしたというニュース⁶が話題となったが、記事の写真を見ると、日本であれば「チキンサンドイッチ」ないし「チキンサンド」というよりは「チキンバーガー」と言ってもよいような商品であった。日本マクドナルド株式会社のサイトでバーガーメニュー⁷を見ると「スパチキ（スパイシーチキンバーガー）」と「チキチー（チキンチーズバーガー）」という商品名が見られる。KFCのメニューページ⁸には「チキンフィレサンド」と「和風チキンカツサンド」という商品名が見られる。ちなみに、日本マクドナルド株式会社のメニューで「サンド」という名称は「ベーコンエッグマックサンド」にのみ用いられている。FRESHNESS BURGERのHamburgerメニュー⁹には、英語で“Chicken Burger”/“CRISPY CHICKEN BURGER”/“SALT LEMON CHICKEN BURGER”/“HOT CRISPY CHICKEN BURGER”/“TERIYAKI CHICKEN BURGER”の商品名が並んでいる。

Wikipedia¹⁰によると“A hamburger (short: burger) is a sandwich consisting of one or more cooked patties of ground meat, usually beef, placed inside a sliced bread roll or bun.”ということであるから、牛肉のパテにチーズを加えて“cheese burger”ということはあるが、牛肉の代わりに“fish burger”/“chicken burger”/“pork burger”ということはあるが、得ない名称かもしれない。大豆などから製造された人造肉をパテとする製品¹¹を“burger”と呼んではいけない、というような法律制定の動きや裁判¹²などが話題

になった。日本語の「ハンバーガー」・「バーガー」はそこまでの制約なしで使用され、「サンド」が具材と組み合わせられて「ハムサンド」・「カツサンド」・「たまごサンド」となるように、「かつバーガー」・「エビバーガー」・「チキンバーガー」など、自由にさまざまな具材との組み合わせで「バーガー」の名称を用いている。

3. いま、ここにはない世界への言及

いま、ここに眼前にある事象・事物についての意思疎通は必ずしも言語を必要とせず、身振り手振り現物の交換で用が足りる場合もある。あるいは、片言の外国語や単語を並べただけで十分かもしれない。しかし、明日の午後の天気は晴れだろうとか、今ここにある100ドルを今ここでリラに替えたらいくらになるのか、というような未来の事象や仮定に基づく話題を正確に伝えようとする、言語の使用が有効となるであろう。

日本の料理・菓子などには茶道の影響などから見立てに基づく「銘」の使用があり、「氷室」や「岩うつ波」などの名称をそのまま英語に訳しても、素材・調理法・味付け・食べ方など、重要な情報が何も伝わらない可能性が高い。「岩打つ波」は百人一首の源重之の作品が下敷きになっているが、ある社会で基礎的な教養として共有されている文学作品などに対する陰伏的な言及が対象に対する理解を複合化させるのは様々な分野で一般的に見られる言語表現技法である。

前提となる教養が共有されない外国語・異文化の世界にこれを文字通り翻訳して持ち込むことは容易ではない。小説の翻訳・映画の字幕や吹き替えなどでは、長さの制約や叙述の雰囲気や壊す可能性を覚悟しつつ、説明的な補足を追加せざるを得ない場合もある。¹³日光の参道沿いにある和菓子店の饅頭に青龍・朱雀・白虎・玄武の名称が与えられているが、これを英語に直訳して blue dragon などとしても、それだけでは何も

⁶ <https://news.livedoor.com/article/detail/17347867/>

超人気のチキンサンド トラブル頻発…殺人事件も

2019年11月7日 20時10分 テレ朝 news

⁷ <http://www.mcdonalds.co.jp/menu/burger/>

⁸ <https://www.kfc.co.jp/menu/>

⁹ <https://www.freshnessburger.co.jp/menu/hamburger>

¹⁰ <https://en.wikipedia.org/wiki/Hamburger>

¹¹ 一方、以下のようなサイトも多い。

<https://altmeatco.com/products/burger/>

<https://www.seriousseats.com/best-meat-substitute-burgers-taste-test>

<https://www.realsimple.com/food-recipes/recipe-collections-favorites/popular-ingredients/alternative-meats>

¹² 以下のような事例が報告されている。

<https://www.vox.com/future-perfect/2020/10/24/21526922/eu-veggie-burger-label-ban>

<https://www.theguardian.com/world/2020/oct/23/european-farmers-lose-attempt-to-ban-terms-such-veggie-burger>

<https://www.dallasnews.com/news/politics/2021/05/10/texas-house-oks-bill-to-ban-plant-based-foods-from-using-meat-and-beef-in-names/>

<https://globalnews.ca/news/5676707/veggie-burger-label-ban/>

<https://www.greenqueen.com.hk/texas-lawmakers-pass-bill-banning-beef-chicken-other-meat-terms-on-plant-based-labels/>

¹³ 本稿の副題にある「危険な曲がり角」はブルバキへの言及であるが、これを英語にそのまま訳しても意味が通じない。英語の副題にはルイス・ブニュエル監督作品への言及を意図した部分があるが、あまり成功していないかもしれない。

伝わらないであろう。

比喩的な表現を外国語から日本語にそのまま直訳すると意味が通用しなくなる例がある。2020 年には COVID-19 関連のビデオ・ニュースなどが多数提供されたが、“epicenter of pandemic” と云う表現を耳にすることが多かった。初めて耳にしたときは「さすがジャーナリストは言葉を知らないな」と嘖然としたが、どういう意味・意図なのかは不明だが、SARS の 2003 年以降 “epicenter of pandemic” の表現がそれなりの頻度で使われている。tsunami も様々な文脈で比喩的に使われることが多いが、多くの場合そのまま「津波」と日本語に直訳しても意味が通じることが多い。しかし、“epicenter of pandemic” を「疫病の震央」と訳しても日本語として全く意味が通じない。

reverso¹⁴から epicenter の例を見てみよう。

1. The capital of Hamilton is a harbor city and the epicenter of the business and finance community.
2. Once a busy warehouse and manufacturing center, this neighborhood has transformed in recent years into the epicenter of Portland's art and design scene.
3. So, within six months Europe became the epicenter of the money-laundering activities of the world.
4. The first difference is the fact that Japan never became the epicenter of a global financial crisis.
5. The reason that Lofa County is so important is because about five months ago, when the epidemic was just starting to escalate, Lofa County was right at the center, the epicenter of this epidemic.
6. It is also the epicenter of one of the fastest-growing HIV epidemics in the world.

上記のうち 1. と 2. はこの文面だけからは肯定的とも否定的とも取りにくい中立的な内容で、epicenter という表現をなぜ使用したか不明である。3. と 4. は全体としては人類や社会に対して悪影響が大きい事象が波及するときの中心という雰囲気を感じられる。5.

¹⁴

<https://context.reverso.net/%E7%BF%BB%E8%A8%B3%E8%8B%B1%E8%AA%9E-%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E/epicenter>

と 6. は、巧みな文章表現であるかどうかは別として、“epicenter of pandemic” という表現から、source domain が seismology で target domain が epidemiology ということがわかりやすい。

比喩の機能や解釈については様々な理論的構成が提案されているが、ある事物・事象を表現するのに、別の事物・事象を持ち出して、それとの比較・対比で対象を理解し、表現する行為だといえよう。直截的な表現との違いは、対象を表す際に別の事物・事象に言及する点で、これは共通の基礎的な教養に依拠して陰伏的に言及する表現方法と同じように、対象とは別の事物・事象を聞き手・読み手に想起させる表現方法である。映画を例にとると、Ridley Scott の 1982 年監督作品 *Blade Runner* は公開時点から見て未来である 2019 年の Los Angeles を舞台に設定しているが、監督を始めとする制作陣が日本の都市、特に東京と大阪の景観を意識していたことはよく知られている。劇場用アニメ作品「攻殻機動隊」は 1995 年に公開されたが、2029 年以降の未来の東京を舞台としながら、映像的には 1995 年当時の香港の都市景観と政治的状况を背景として利用している。一つの事物を見るにあたって、そこにはない別の事物を重ね合わせるという表現技法は、今日であれば Pokémon GO などにも見られる AR: augmented reality に通じるところがある。

4. 動作・ジェスチャー・記号

海外からの旅行者の間で話題になる「日本特有の」事物の一つに、鉄道関係者などにみられる指差喚呼がある。こうした動作の意義や習慣もまた、それぞれの文化に固有の部分がある。自分のことを指差すさいに、日本人は顔の中央あたりに指をあてることも多いが、多くの欧米人にとってこれに似た侮蔑的な動作があるため、海外旅行や外国人と接する場面では留意が必要であると旅行会話の教科書などに書かれている。

昭和の時代に NHK が放送していたある時期の人気番組に「ジェスチャー」があった。ある単語や表現が題目として与えられ、数人のゲストが動作でこの内容を表現し、回答者が元の単語や表現をあてるというゲームである。英語圏ではこれと似た Charade というゲームがあるが、特定の動作で特定の音節を表現し、これをつなげることで単語を推定させるというところが「ジェスチャー」とは大きく異なっていた。

言語使用者のコミュニティーがあり、語彙と文法の

体系に基づく sign language¹⁵ とは別に、動作や身振り、身体の形などで何らかの意味を表し伝えようとするコミュニケーションの体系には手旗信号などの体系もあるが、このほかに動作や身振り手振りでの場限りで意味を伝えようとする試みは自然発生的に見られ、それが形式化する場合もある。同じ（ような）動作が言語的・文化的習慣を共有しない人にそのままでは通用しないと考えるべき事例がある。次の二つの説明は英語学習者・中国語学習者に対する注意事項である。

NG ジェスチャー (1) ¹⁶

NO とかダメですと言いたい時に、胸の前で腕をクロスさせバツを作るのは日本式で、英語人には通用しません。バツという感覚がないので、どういう意味ですか？と必ず聞かれます。首を横に振って NO を表しましょう。

「○ (マル) =正しい、当たっている」は中国人向けには使えない¹⁷

日本人は「○ (マル) =正しい、当たっている」と思っていますからよく両手で○ (マル) を描くジェスチャーをします。「当たり前、その通り」の意味です。これは中国人にはまったく通じません。では× (バツ) はどうか？両腕を交差させて× (バツ) を作ったら「ダメ」という意味になるか？微妙です。こういう習慣がないからです。「ダメ」をジェスチャーだけで示したかったら首を横に振るといいでしょう。これならたぶん通じます。

記号の○と×の区別が日本固有であるという説明は、アンケートの回答記入例や (小) テストの採点結果表記に関連して話題になることもあり、小型ゲーム機のスイッチやインタフェースについて話題になることもある。したがって、上記のような解説は常識的であるが、そのような常識では理解しきれない事例も見られる。英語に堪能な中国系住民から構成される香港において、腕バツが否定ないし拒否の意味で使われるとしか理解できない事例¹⁸が報道されている。どこまで

¹⁵ Signed Language vs Sign Language

<https://deafculturecentre.ca/signed-language-vs-sign-language/>

¹⁶ <https://www.daijob.com/skillup/mikakosuzuki/20170822.html>

¹⁷ <http://chugokugo-script.net/hyougen/maru-batsu.html>

¹⁸ 次の写真等を一瞥していただきたい。

https://i.guim.co.uk/img/media/de7b9fabe3567f285c105fb688456b856779ca78/0_112_3500_2101/master/3500.jpg?width=1920&quality=85&auto=format&fit=max&s=477c1fe69d02c62d49a211b2feb82e31

https://i.guim.co.uk/img/media/de7b9fabe3567f285c105fb688456b856779ca78/0_112_3500_2101/master/3500.jpg?width=1920&quality=85&auto=format&fit=max&s=477c1fe6

国際的に通用しているか不明だが emoji ¹⁹にもこれに対応するものがある。このように、言語に直接依存しないと思われがちな動作や身振りとそれに基づく記号においても、言語的・文化的習慣の共有がなければ理解が難しく、誤解の一因となる可能性がある一方、常識的な解説が必ずしも正しくない状況も存在する。

同じように言語に直接依存しないように思われがちな図解・絵解き・図面なども、やはり言語的・文化的習慣の共有が理解の前提となっていることが多い。例えば、街中に掲示してある案内図について、日本語で「現在地」となるところが英語では“You are here.”となることは広く知られている。日本の航空会社は離発着の時に機体前方のカメラ映像を客席に見せるが、一般には機体から外界に向かう inside-out の視点である。Air France では尾翼に取り付けたカメラから機体の大部分を映してその周辺に広がる外界を見せる outside-in の視点で客席に提供していた。これは、ある意味で「神の視点と人の視点」ないし「鳥の視点と虫の視点」などの違いに対応するかもしれない。

5. ヘテロトピアの音響景観

特定の音やメロディー、旋律やリズムが社会的・文化的習慣に基づいて何かを想起させることがある。日本では夕方一定の時刻になると夕焼け小焼けのメロディーを地域放送システムで流すコミュニティーも多いが、日本での生活経験のほとんどない外国人旅行者にとっては緊急事態を知らせる案内かと不安に思うかもしれない。一定の年齢より上の日本人にとっては、1960年代までの豆腐屋のラップや屋台のラーメンのチャルメラなどが懐かしい音として記憶に残っている。その後 1970年代になる前後から軽トラックのラウドスピーカーから録音で延々と流される騒音となってしまったが、石焼き芋、灯油、さお竹売り、魚の訪問販売、古新聞・古雑誌回収、家具・家電製品回収などが町や地方都市の音響景観の一部をなしている。建物の間を反響しながら響き渡る石焼き芋販売車のラウドスピーカー²⁰の節回しを聞いて、イスラム教の礼拝の時間

9d02c62d49a211b2feb82e31

Anti-Moral and National Education Protest (2011)

<https://cdn.cnn.com/cnnnext/dam/assets/190613225220-hk-protest-history-05-restricted-exlarge-169.jpg>

¹⁹ Beauty and the Beast As Told By Emoji | Disney

<https://www.youtube.com/watch?v=o4gMJynUqCI&t=38s>

²⁰ 効果音であるが以下などが参考になるであろう。

【効果音】石焼き芋屋 移動販売 フリー音源 (焼きとうもろこし音源付き)

を告げるアザーン²¹を思い出すとエジプト在住経験のあるアメリカ人から指摘されたこともある。鉄道各駅の発着音が駅メロとして普及し、新幹線の車内放送のメロディーや航空便の降機の際の音楽など、生活の場面に密着し、強い連想の働くメロディーも多い。ケータイ・スマホの着メロが話題となった時期もあった。²²

外国語の発音・イントネーション・ジェスチャーなどを総合的に学ぶ手法として、演劇・ミュージカルなどの上演まで含めた課題にはさまざまな利点が考えられる。第一著者が1960年代から70年代にかけて通ったカトリック系のミッションスクールの教材は、学校創設期に校舎が未整備だったところに青空演劇のような授業を行ったところの教材が反映して、学期に数度は戯曲的な構成の教材となっただけでなく、民謡的な歌などの要素も盛り込まれていた。このほか、英米文学から英詩を素材として積極的に取り入れ、課外活動用に英語の校歌・応援歌などを学ぶこともあった。

第一著者が1970年代にフランス語を学ぶ際に使用した自習用教材 *Assimil* の *Français sans peine* は各課がアネクト（短くて簡単な落ちのある話）になっていて、7課ごとに民謡・童謡・国家などの歌を覚えるように構成されていた。フランス語でアネクトを話すときの緩急やイントネーションの変化を自然に学び、フランスの子供たちが慣れ親しんでいる歌のうちのいくつかは歌詞も含めて覚えることになった。後年、1980年代に大学院博士課程在学のころ、都内の名画座に加えて京橋のフィルムセンター・駿河台のアテネフランセ・九段のイタリア文化会館・飯田橋の日仏学院・青山のゲーティンステイテュートと草月ホールなどに通って様々な映画を見ていた時期に *Jean Renoir* の1931監督作品 *La chienne* を見る機会があったが、作中登場人物があるきっかけで、フランス民謡 *Marlbrough s'en va-t-en guerre* を口ずさむ。この歌詞を知らないと、物語の流れの中での登場人物の気持ちと思感が理解できない。

第一著者が1980年代後半にトランジットの都合で初めてシンガポールに1日ほど滞在した時、ホテルからダウンタウンまでバスで出ようとして車内に英語の路線図も案内放送もなく、慌てた記憶がある。2004年

<https://www.youtube.com/watch?v=A2thZICNuzk>

²¹ 礼拝の行い方 - 1 アザーン (How to pray - Adhan)

<https://www.youtube.com/watch?v=pnhtCiRNKns>

²² 音響景観の観察・分析・考察・活用も *authenticity* を重視した外国語学習用視聴覚教材等の開発においては重要な要素である。

以降に何度かシンガポールを訪問したが、大学構内のエレベータのカーゴ案内で“Going up.”という時はかなり明瞭な上昇調で、反対に“Going down.”という時はそれなりの下降調であることが印象に残った。

パリ地下鉄メトロで移動中に車内放送が聞こえてきて、駅に到着する少し前に“Odeon.”と明確な下降調ではなく、若干上昇・下降気味で *pending* な印象を与える放送があり、列車がホームに差し掛かると“Odeon.”と頭高・下降調で放送が聞こえた²³。旅行者の一度だけの経験なので、一般的な法則性があるのか、たまたまその時にそうであったのか地元在住の言語学者に雑談の中で尋ねてみたところ、そのような使い分けをしているらしい回答を得たが、公式の資料等で確認できていない。フランス国鉄 SNCF の駅構内での放送とそれにとまう *audio logo / identite sonore* の音響的美しさ²⁴は構内の美観と対照的で印象的である。

日本には1960年代末から多くの *audio / Hi-Fi* 関係のメーカーがあり、家電メーカーもオーディオ系のブランドから商品を出し、一定の品質と評価を確保していたにもかかわらず、町中や学校の PA の音質や聞き取りやすさは極めて悪い状態が2021年になっても続いている。機器のカタログ上の特性とは無関係に、使う側がマイクの入力段で歪ませない使い方を体得していないために、その後の機器・装置がいくら高品質を詠っても、最終的にスピーカーから放送される音声歪んでいることが多い。特に、学校で流される音声歪んでいることが多い²⁵ため、子供のころから大きな

²³ 検索してみたところ次の *video clip* が見つかった。英語・日本語などの放送の前に *Bastille* の駅名が2回聞こえてくる。パリメトロ1号線の日本語放送 - In-car Japanese announcement of Paris Métro Line 1

<https://www.youtube.com/watch?v=z4IMv-nr6M4&t=79s>

次のビデオは地下鉄ではなく *tram* であること、車掌の肉声ではなく録音音声らしいこと、一回目と二回目で男声と女声と異なった音声を使用していること、駅ごとに独特の曲が聞こえることなどいくつかの違いがあるが、駅名アナウンスには地下鉄で経験したのと同じ抑揚を感じる。

フランス・パリのトラム、車内の駅名アナウンスと BGM

<https://www.youtube.com/watch?v=NJ3oqzf2S1U>

²⁴ 以下にいくつかの音声収録されている。

Sixieme Son

<https://www.sixiemeson.com/sncf/>

SNCF - Audio Logo

<https://www.youtube.com/watch?v=8eGq3dyzH-o>

SNCF - Signature

<https://www.youtube.com/watch?v=NA5MwhuHWLo>

²⁵ 東急東横線が渋谷駅始発・終着であった頃は、出発前の車両の最後尾にいますと、車掌が車掌室と客室との通路ドアを少し開いて、放送の音量などを確認しながら案内していたことを、当時の東急線車掌の制服の身ざれいさとともに思い出します。

音とは歪んでいる音のことだという勘違いが定着し、マイクの使い方がおかしいままとなる。駅などでは、同一ホームの別トラックや隣接するホームの音が重なって、お互いに放送音声をかき消しあうため、うるさいのに聞き取れない。また、録音案内を流している途中でホーム上の駅務員が別の放送を重ねるためにどちらも聞き取れないということも日常的に経験する²⁶。特定の休日などに都心などに横行する街頭宣伝車や選挙のたびに繰り返される候補者応援車の騒音も聞くに堪えないどころか、ただただ不快になるばかりである。

6. 本 Organized Session の進行予定

本稿執筆時点で本 organized session は 2021 年 9 月 4 日 16:20 開始・18:30 と予定されている。以下のタイムテーブルを目安として進める。

16:20-16:35	基調講演：原田康也・佐良木昌・森下美和・平松裕子 観光客と情報環境（言語景観・意味景観）とのインタラクション：多層的異文化コミュニケーションの危険な曲がり角
16:35-16:50	招待講演：平松裕子 「見立て」の成立：文化地域における発信者（日光店主）と受信者（観光客）間のコミュニケーション
16:50-17:05	招待講演：森下美和 「神戸における外国人居留地の言語景観」
17:05-17:20	招待講演：伊藤篤 「ICTによる旅行の安心安全：スマホアプリによる支援のありかた」
17:20-17:45	招待講演：佐良木昌 言語表現と認知機序との間隙
17:45-18:00	公募発表：藤原智宏・金成慧・伊藤篤・佐藤美恵 AR 技術を用いた観光情報の提示手法に関する検討
18:00-18:20	総合討議：参加者全員

謝辞・注記

本稿の執筆ならびに本 organized session の企画と開催に当たって、著者たちは以下の研究経費等の支援を受けている。

- ・ 科研費基盤研究(C)：課題番号 21K00744 『高度翻訳知識に基づく翻訳文法の構築に関する研究』(研究代表者：佐良木昌・明治大学・知財戦略機構・研究推進員)
- ・ 科研費基盤研究(C)：課題番号 18K11849 『ネット

社会におけるインバウンド観光客・定住者を意識した文化伝達の言語表現』(研究代表者：平松裕子)

- ・ 科研費基盤研究(B)：課題番号 17H02249 『ICTによる観光資源開発支援：心理学的効果を応用した期待感向上』(研究代表者：伊藤篤)
- ・ 早稲田大学特定課題研究助成費(特定課題 B) 課題番号 2018B-016 『汎濫するカタカナ語の言語(英語・日本語)学習に対する影響の調査と対応策の提案』(研究代表者：原田康也)

参考文献

- [1] Dan Jurafsky, *The Language of Food: A Linguist Reads the Menu*, W W Norton & Co Inc; Reprint 2015/10/13.
- [2] Nami Fukutome & Yasunari Harada, "Flavor Wheel Terminology and Challenges in Translation: Focusing on English and Japanese Vocabulary for Wine, Sake and Soy Sauce," *Proceedings of the 32nd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation: 25th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing*, pp. 867-872, Association for Computational Linguistics, 2018 年 12 月 1 日.
- [3] 原田康也・平松裕子・森下美和・伊藤篤, 「インバウンド観光客の情報環境(言語景観・意味景観)とのインタラクション：多言語・多文化社会における ICT 支援を視野に」, 日本認知科学会第 36 回大会発表論文集, pp. 1040-1046, 日本認知科学会, 2019 年 9 月 5 日.
- [4] 原田康也, 「シロガネーゼ対おたかジェンヌ：カタカナ形態素おそるべし」, 電子情報通信学会技術報告 TL2019-1, vol. 119, No. 114, pp. 1-6, ISSN 0913-5685 / ISSN 2432-6380, 社団法人 電子情報通信学会, 2019 年 7 月 7 日.
- [5] 原田康也・平松裕子・森下美和, 「カタカナ語の英語学習に対する影響」, 日本認知科学会第 36 回大会発表論文集, pp. 508-516, 日本認知科学会, 2019 年 9 月 5 日.
- [6] 原田康也・平松裕子・森下美和・佐良木昌, 「Hot Sand と岩うつ波」, 電子情報通信学会技術報告 TL2019-54, vol. 119, No. 352, pp. 67-72, ISSN 0913-5685 / ISSN 2432-6380, 社団法人 電子情報通信学会, 2019 年 12 月 8 日.
- [7] 小勝健一, 「車掌の口、乗客の耳：車内放送のメディア文化史」, 北海道大学国際広報メディア・観光学院平成 21 年度修士論文, 2010 年 3 月 25 日.

²⁶ [7] に興味深い指摘が多々ある。